豊岡市出石町

鳥　居　城　跡

— 一般国道482号鳥居橋橋梁整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2011（平成23）年3月
兵庫県教育委員会

鳥　居　城　跡

兵庫県文化財調査報告　第392冊
兵庫県教育委員会

22枚①1～020 A4

豊岡市出石町

鳥　居　城　跡

— 一般国道482号鳥居橋橋梁整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2011(平成23)年3月
兵庫県教育委員会

有子山城跡と鳥居城跡遠景（北から）

鳥居城跡遠景（北東から）

調査区東半部（北西から）

竪堀全景（北東から）

例　言

1．本書は兵庫県豊岡市出石町鳥居に所在する、鳥居城跡の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、一般国道482号鳥居橋橋梁整備事業に伴うもので、兵庫県但馬県民局豊岡土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成20年度に本発掘調査を実施した。
3．出土品整理は、平成21・22年度に兵庫県立考古博物館が実施した。
4．遺構の航空写真撮影は株式会社ジャパックスに委託して実施した。
5．写真は遺構については調査員が撮影し、遺物については㈱タニグチ・フォトに委託した。
6．本書に用いた図のうち、第2図は国土地理院1/25000地形図「出石」、「江原」、「豊岡」、「須田」を、第3図は大日本帝国陸地測量部1/50000地形図「豊岡」、「出石」を使用した。
　第4図は西尾孝昌氏作成の縄張り図を、再トレース・加筆したものである。
7．出土品の自然科学分析は、放射性炭素年代測定（AMS）を株式会社パレオ・ラボに委託して行った。
8．本書の執筆は調査担当者が分担し、編集は杉村明美の補助をえて長濱が行った。
9．本書にかかる写真・図面、遺物は兵庫県立考古博物館および魚住分館に保管している。
10．発掘調査および報告書作成にあたり下記の方々にご教示、ご指導を頂いた。記して感謝の意を表します。
　豊岡市教育委員会　西尾孝昌　中井淳史（敬称略）

凡　例

1．本書に使用した方位は、国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

2．土層色調名および土器の色調名は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帳』1999年度版によった。

3．遺物番号は本文・図版・写真図版とも同一として通し番号としている。
　また石製品には番号の前に「S」、鉄製品には「M」を冠し、遺物の種類ごとに通し番号としている。

4．土器・土製品の実測図のうち、土師器は白抜き、須恵器は黒塗り、瓦質土器は網掛け（薄）、陶磁器は網掛け（濃）として区別している。

本文目次

例言

第１章　調査の経緯・経過と体制 …… （岸本）… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯
　第２節　発掘調査の経過と体制
　第３節　出土品整理作業の経過と体制

第２章　遺跡をとりまく環境 …… （長濱）… 5
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境

第３章　調査の結果 …… （長濱）… 9
　第１節　鳥居城跡
　第２節　鳥居城跡の遺構と遺物
　第３節　その他の遺構と遺物

第４章　自然科学分析結果
　放射性炭素年代測定（AMS） …… （株式会社パレオ・ラボ）… 16

第５章　総　括 …… （長濱）… 19

挿図目次

第１図　調査箇所位置図 …… 4
第２図　周辺の遺跡 …… 6
第３図　鳥居城跡周辺の城館 …… 8
第４図　鳥居城縄張り図と調査区 …… 9
第５図　木棺墓 …… 15
第６図　暦年較正結果 …… 18
第７図　工事のすすむ鳥居城跡付近 …… 21

表　目　次

第１表　測定試料及び処理 …… 16
第２表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果 …… 17
第３表　土器観察表 …… 22
第４表　石製品観察表 …… 23
第５表　鉄製品観察表 …… 23

図版目次

図版１　調査区全体図
図版２　東区調査前地形図
図版３　東区遺構図
図版４　東区断面図
図版５　曲輪Ⅱ　平面図
図版６　曲輪Ⅱ　断面図
図版７　曲輪Ⅲ　平面・断面図
図版８　曲輪Ⅲ－２　平面・断面図
図版９　中～西区全体図
図版10　中区遺構図
図版11　竪堀１　平面・断面図
図版12　曲輪Ⅳ－２付近断面図
図版13　出土遺物（１）
図版14　出土遺物（２）
図版15　出土遺物（３）

巻頭図版目次

巻頭図版１　有子山城跡と鳥居城跡遠景・鳥居城跡遠景
巻頭図版２　調査区東半部・竪堀全景

写真図版目次

写真図版１　遺跡　遠景・遠景・鳥居城跡全景
写真図版２　遺跡　鳥居城跡全景・鳥居城跡全景・調査区全景
写真図版３　遺構　調査区遠景　調査前・東区　調査前・東区　調査前
写真図版４　遺構　東区全景・曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ－２・曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ－２
写真図版５　遺構　曲輪Ⅱ平坦面・曲輪Ⅱ平坦面盛土除去後・曲輪Ⅱ全景
写真図版６　遺構　曲輪Ⅱ溝・柱穴列・曲輪Ⅱ溝・曲輪Ⅱ平坦面盛土断面
写真図版７　遺構　曲輪Ⅱ北端部盛土断面・曲輪Ⅱ－２・曲輪Ⅱ－２
写真図版８　遺構　曲輪Ⅲ平坦面・曲輪Ⅲ平坦面盛土除去後・曲輪Ⅲ平坦面盛土除去後
写真図版９　遺構　曲輪Ⅲ溝・曲輪Ⅲ北端の小段・曲輪Ⅲ盛土断面
写真図版10　遺構　曲輪Ⅲ溝断面・曲輪Ⅲ北端盛土断面・曲輪Ⅲ犬走り状遺構
写真図版11　遺構　曲輪Ⅲ－２平坦面・曲輪Ⅲ－２平坦面盛土除去後・曲輪Ⅲ－２平坦面盛土除去後
写真図版12　遺構　曲輪Ⅲ－２平坦面盛土除去後・曲輪Ⅲ－２盛土断面・曲輪Ⅲ－２犬走り状遺構
写真図版13　遺構　曲輪Ⅳ－２全景・曲輪Ⅳ－２全景・曲輪Ⅳ－２全景・曲輪Ⅳ－２付近断面・通路

写真図版14　遺構　竪堀１全景・竪堀１全景・竪堀１断面・竪堀１埋土内炭化物検出状況
写真図版15　遺構　竪堀１付近の状況・竪堀２・畝状竪堀
写真図版16　遺構　木棺墓・木棺墓・木棺墓　鉄剣出土状況
写真図版17　遺構　中区～西区全景・西区・西区
写真図版18　出土遺物
写真図版19　出土遺物
写真図版20　出土遺物
写真図版21　出土遺物
写真図版22　出土遺物

第１章　調査の経緯・経過と体制

第１節　発掘調査に至る経緯

１．台風23号の概要

平成16年10月、台風23号（トカゲ）は西日本の広い範囲に浸水害や土砂災害を引き起こした。

台風23号は、平成16年10月13日午前９時にマリアナ諸島近海で発生し、10月18日の午前９時には超大型で強い勢力となって沖縄の南海上を北上した。10月19日には沖縄本島から奄美諸島沿いに進み、10月20日午後１時頃には大型の強い勢力で高知県土佐清水市付近に上陸した後、午後３時過ぎに高知県室戸市付近に再上陸した。その後、同日午後６時前に大阪府泉佐野市付近にふたたび上陸し、近畿地方、東海地方に進み、東日本を横断して10月21日午前９時に関東の南海上で温帯低気圧となった。

台風23号は西日本の広い範囲に浸水害や土砂災害を引き起こしたが、本州の南側にあった秋雨前線を押し上げながら移動したことにより極端な大雨につながったといわれ、台風と前線の影響による期間総降水量は、四国地方や大分県で500㎜を超えたほか、近畿北部や東海、甲信地方で300㎜を超え、広い範囲で大雨となった。特に、台風が西日本に上陸した10月20日は、九州地方から関東地方にかけての多くの地点で、それまでの日降水量の観測記録を上回る大雨となった。また、台風の接近と上陸に伴って、南西諸島から東日本にかけての広い範囲で、暴風・高波となった。

この台風により、兵庫県豊岡市や出石町を流れる円山川・出石川が氾濫、京都府福知山市から舞鶴市を流れる由良川が氾濫して浸水害が発生した。また、岡山県玉野市、京都府宮津市、香川県東かがわ市、香川県四国中央市など、西日本を中心に土砂災害が発生した。さらに、高知県室戸市では、高波により堤防が損壊する被害があった。台風23号は、高波、大雨、土砂崩れ、洪水など、広い範囲に多大な被害を及ぼし、全国における人的被害は、死者100人弱、行方不明者３人、負傷者552人、住宅被害は全壊893棟、半壊7,764棟、一部破損10,841棟にものぼる甚大な被害となった。

２．豊岡市の被害

豊岡市では、平成16年10月20日正午頃から雨足が強まり、降り始めから午後６時までの総雨量は、旧豊岡市で162㎜、円山川上流の和田山では169㎜、出石川上流の出合で228㎜、稲葉川上流の栗栖野で215㎜、奈佐川上流の辻では226㎜を記録した。その後も午後８時までの２時間に、円山川と稲葉川上流域での時間雨量20～30㎜の激しい雨が降り続き、旧豊岡市内の浸水被害がひろがるなか、桜町の豊岡測候所が浸水し、観測不能となった。

円山川下流部は、河口との落差が１ｍと低平地のため、満潮時には河口から約16㎞上流の出石川合流点付近まで海水が浸入する。過去にも幾度となく流域に水害をもたらせているが、台風23号による水害はこれらを上回るもので、過去に例を見ない急激な増水であり、高水位であった。

円山川の水位は、豊岡市立野町で20日午後８時に8.13ｍ、午後９時には8.29ｍに達し、堤防の限界である計画高水位の8.16ｍを上回った。また、日高町赤崎では午後８時に8.03ｍ、出石川では出石町広原で午後７時に5.36ｍを記録したが、いずれも過去に例を見ない急激な増水であった。各地で堤防越水が報告され始め、午後11時15分に豊岡市立野町円山川堤防右岸が破堤、豊岡市一日市円山川左岸堤防の欠損により市内の約８割が浸水、さらに午後11時37分に出石町鳥居の出石川堤防左岸が破堤し出石町小坂地区が浸水した。

現豊岡市での建物被害は、全壊333棟、大規模半壊1,082棟、半壊2,651棟、一部損壊292棟、床上浸水

545棟、床下浸水3,326棟におよび、兵庫県下における台風23号被害の約半数を占めた。これにより、10月21日に災害救助法、10月31日に被災者生活再建支援法、12月１日に激甚災害の指定を受けることとなった。また、人的被害は死者７人で、６人は洪水、１人は土砂災害によるもので、洪水による死者のうち１人は破堤により流出した家屋とともに流されたことにより、４人は車両で走行中に洪水に巻き込まれ脱出不能もしくは脱出後に流され死亡したもの、１人は水没した家屋内で発見されたものである。負傷者は計51人で、負傷の原因は転倒や飛んできたものに当たるなどのほか、水害後の清掃作業中に負傷したもの等であった。

３．豊岡市出石町の被害

豊岡市出石町内では、大雨と河川の増水により、平成16年10月20日午後３時頃から内水氾濫や土砂崩れなどが各地で発生した。

20日午後６時過ぎ頃に、出石川右岸の寺坂と日野辺および左岸の桐野と上野で破堤したほか、午後11時過ぎには出石川左岸の鳥居で堤防が決壊して広範囲に浸水し、鳥居地区では多くの民家が壊滅的な被害を受け、小坂地区は泥の海と化した。

また、午後７時30分頃には奥山川上流の人工林の風倒木が流され、奥山川に架かった橋脚のある橋を次々と流した後、出石川と合流する手前の橋に引っ掛かりダムのような状態となった。このため奥山川両岸の鍛冶屋地区と福住地区が濁流に襲われたほか、午後７時45分頃に福住の出石変電所が浸水したため、町域の広い範囲で停電が発生した。

これらの影響により、出石町内の710haが浸水し、住宅、工場、店舗、農地、林地、道路、上下水道、その他公共施設等に多大な被害を及ぼし、住宅被害は全壊34棟、大規模半壊77棟、一部損壊21棟、床上浸水53棟、床下浸水145棟にのぼった。

４．鳥居橋橋梁整備事業の概要

平成18年１月17日、出石川左岸の堤防が決壊した鳥居地区において、台風23号による被害に対応するための河川改修事業に伴う治水上の観点から、一般国道482号の出石川に架かる鳥居橋が撤去された。

一般国道482号は、京都府宮津市を起点として丹後半島を周回し、兵庫県但馬地域を東西に縦断して鳥取県米子市に至る、延長333.3kmの幹線道路であり、地域の農業および商業等の社会生活基盤を支えている道路である。出石川に架かる鳥居橋は、昭和10年に架橋された橋梁で、架橋から70年以上を経過した老朽橋であり、しかも車道部幅員は狭小で、大型車同士の離合時には困難を伴い、円滑な交通流が阻害されていた。また、朝夕の通勤通学時には鳥居橋東詰交差点で交通混雑が発生し、交通事故も平成15年から平成17年の３年間で28件発生していた。

鳥居橋橋梁整備事業は、鳥居橋の幅員狭小および老朽化の解消を図り、安全かつ円滑な交通を確保することを目的として、バイパス方式による２車線の道路を整備する事業であり、鳥居橋の上流約150mの地点で出石川を渡り、出石川の西岸にある鳥居集落の南側外郭部に沿って、現道に至る路線である。

なお、豊岡市長等からなる、兵庫県国道428号鳥居橋整備促進期成同盟会から、台風23号の被災地である鳥居における、鳥居橋橋梁整備事業の早期完成に関する強い要望があった。

鳥居橋橋梁整備事業区画内には周知の埋蔵文化財である鳥居城跡が存在しており、事業者である兵庫県但馬県民局豊岡土木事務所と兵庫県教育委員会が協議した結果、事業区画内にかかる鳥居城跡の部分については記録保存とし、但馬県民局長からの依頼により平成20年11月から本発掘調査を実施した。

第２節　発掘調査の経過と体制

１．発掘調査の体制

発掘調査の対象地はすでに周知となって、縄張り図が作成されている鳥居城であることから、確認調査は実施せずに、本発掘調査を実施した。

発掘調査は記録保存を前提とし、事業者である兵庫県但馬県民局長(豊岡土木事務所)から兵庫県教育委員会が委託を受け、兵庫県立考古博物館が実施した。また、用地内には未買収地が含まれていたが、土地所有者の埋蔵文化財発掘調査承諾書により調査を実施した。

調査実施場所は豊岡市出石町鳥居で、字名には家ノ前、鏡巻、才の神などがあり、調査面積は1,344㎡、兵庫県教育委員会が設定した遺跡調査番号は2008170である。

発掘調査担当者は兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部調査第２班の岸本一宏、長濱誠司であり、現場事務員として出石町在住の中村佳代子を現地雇用し、豊岡市教育委員会の小寺誠氏のご協力を得た。

発掘調査は、発掘調査工事として(株)川嶋建設に委託し、下請業者は(有)松浦興業で、松浦興業所属の作業員が調査にあたると同時に、調査補助員として(有)松浦興業から協力を受けた。また、発掘調査後の地形測量は空中写真測量とし、(株)ジャパックスに委託して撮影および測量図を作成した。

発掘調査の際には立木伐採を行い、立木・枝葉・根株は5.0㎞離れた(有)荒田造園で処分した。また、掘削土のすべてはダンプトラックにて搬出し、10.3㎞離れた豊岡アールエスエル(協)で処分した。

２．発掘調査の経過

発掘調査の対象地はすでに周知となっている鳥居城の北東端の支曲輪群および主郭北側堀にあたり、大まかには東側の地区と西側の山堀である細長い部分に分けることができる（第１図）。

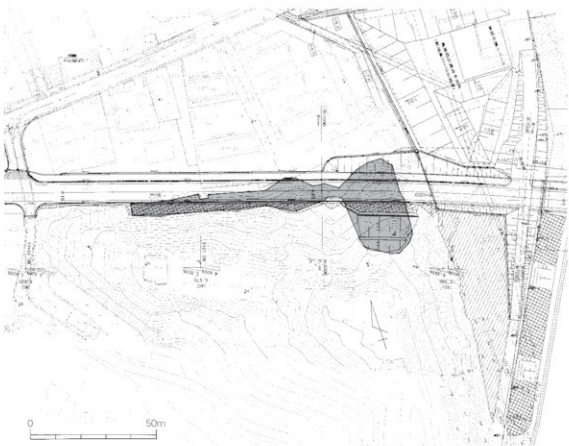
発掘調査の着手日は、(株)川嶋建設との発掘調査工事の契約上は2008(平成20)年10月21日であったが、監督員詰所が完成したのが11月14日で、現地測量等の実質的な調査を実施することができるようになったのは、11月18日であった。したがって、現地調査は引きあげの2009(平成21)年１月30日までの約２ヶ月半にわたって実施した。また、発掘調査工事の工事完成検査は２月10日に実施した。

調査は、掘削前の現況測量から開始した。兵庫県立考古博物館調査第２班の吉田昇、西口圭介を加えた４名で、鳥居城北東端支曲輪群(曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ－２)について平板による地形測量を実施した。

その後、急傾斜であることから昇降階段を設置し、数か所に土層観察用の畔を設定して機械掘削および人力掘削を開始した。調査の過程で、鳥居城北東部最上段にある曲輪Ⅱの南端付近から多量の土師器小皿が出土し、同時に古墳時代初頭の土師器や古墳時代中期の須恵器、鎌倉時代の経筒外容器が破片となって出土したことから、安土桃山時代に鳥居城を築城した際に古墳や経塚が破壊されたと判断された。また、主郭北側堀部分では、東端付近において岩盤を掘り込んだ古墳時代の木棺墓が検出され、そこから鉄剣が出土したほか、そのすぐ西側では鳥居城の竪堀の北端部が検出された。この竪堀は意識的に埋められていた。なお、鳥居城北東端支曲輪群は岩盤まで掘り下げて加工されていたことから、岩盤上面まで掘削した。

掘削完了後には足場を設置して写真撮影を行い、2009(平成21)年１月８日には空中写真撮影を実施した。

なお、2009(平成21)年１月24日(土)の午後に現地説明会を実施した。当日は降雪および約10㎝の積雪があったが、地元の方々を含めて約30名の見学者があり、関心が高いことが示された。



第１図　調査箇所位置図

第３節　出土品整理作業の経過と体制

今回の鳥居城跡発掘調査で出土した土器は４箱分（ＴＳ－28）であり、土師器を中心として少量の須恵器などが含まれていた。金属器は木棺墓から出土した短剣をはじめ、鉄釘や煙管など合計６点、石製品では石仏や砥石など３点が出土した。なお、石仏については祀ってあったものが台風23号による洪水で流されたという情報を得たために地元で照会を行ったが、所有者は判明しなかった。

出土品整理および報告書作成は、遺跡や遺物の記録を残すための作業であり、土器などの破片の接合、接合した土器の空間を埋める補強や復元、土器・石製品の原寸大の実測、遺物実測図や遺構図の浄写であるトレース、トレース図を印刷用の版下にするためのレイアウト、遺物の写真撮影、自然科学的な分析などのほか、原稿執筆がある。

鳥居城跡の出土品整理および報告書作成は、2010（平成22）年度に兵庫県立考古博物館において実施した。また、発掘調査と同様に、開発事業者である但馬県民局長からの依頼により行った。

出土品整理作業は長濱誠司を主担当として嘱託職員が担当した。遺物の接合・補強と復元は嘱託職員の吉田優子・眞子ふさ恵・三好綾子・嶺岡美見が行い、遺物実測と遺物・遺構トレースおよび遺物図・遺構図・写真のレイアウトは嘱託職員の友久伸子・杉村明美・島田留里がおこなった。

また、上記以外の実測図チェックと遺物図レイアウト案、遺構トレース原図作成および遺構・遺物の原稿執筆は長濱が行い、原稿の一部を岸本一宏が執筆した。

なお、遺物写真については㈱タニグチ・フォトに委託して兵庫県立考古博物館において撮影し、炭化物の自然科学分析は株式会社パレオ・ラボに委託して実施し、報告文を掲載した。

第２章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

鳥居城跡は、豊岡市出石町鳥居に位置する。豊岡市は兵庫県北部、旧但馬国に所在し、但馬北部の中心である。ＪＲ山陰線や国道などにより瀬戸内海沿岸地域や京都府、鳥取県と結ばれる。今日の豊岡市は平成17年4月、いわゆる「平成の大合併」により１市５町（豊岡市、出石郡出石町・但東町、城崎郡城崎町・竹野町、日高郡日高町）が合併したものである。総面積697.66㎢、人口約８万９千人を数える。

出石町は豊岡市東部に位置し、合併前は出石郡に属していた。東は但東町、西は日高町、南は養父市、北は京都府久美浜町に接する。町域は200～800m級の山地に囲まれ、山地の面積は町の1/3近くを占め、山地の間をぬうように円山川支流の出石川が町域を貫流する。出石川は京都府境を水源として東流し、市街地南側で北に流路を変える。平野部で支流の小河川と合流し豊岡市街地の南側で円山川に合流する。下流域には平野部がみられ、出石城城下町から発達した市街地とともに山地に囲まれて盆地状を呈する。

第２節　歴史的環境

まず出石神社にふれておきたい。出石神社の祭神は新羅からの渡来人アメノヒボコである。アメノヒボコは伝説上の人物ではあるが、考古学的研究により但馬地域と朝鮮半島との交流が明らかにされつつある。渡来人集団を象徴化したものがアメノヒボコであろう。神社は但馬国一ノ宮であり出石が古来より但馬の伝統的な中心地だったであろうことを特記しておきたい。なお今回の調査地である鳥居地区は神社の西約１kmに位置し、地名は神社の鳥居があったことに由来するとの伝承がある。

旧石器・縄文時代

当該期の遺跡は但馬の高原地域を中心に多数確認されているが、旧石器時代の遺跡は出石町周辺では確認されていない。縄文時代に入ると、砂入遺跡で前期の土坑が検出され、出石神社付近では土器・石器が採集されている。この時期平野部は湿地であるため、遺跡は出石川東岸の山裾にあると思われる。

弥生時代

今のところ集落は確認されていないが、袴狭遺跡群からは前期までさかのぼる土器が出土している。鳥居城跡北側の出石川河道に所在する鳥居遺跡からは中期から庄内併行期の土器とともに破鏡が出土している。宮内黒田遺跡、出石神社境内遺跡、宮内遺跡において弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が多量に出土している。この時期の墳墓は半坂峠墳墓群、御屋敷遺跡、田多地引谷墳墓群、入佐山墳墓群などがあり、丘陵上に築造されている。

古墳時代

かつての出石郡に属していた森尾古墳は古墳時代初頭を代表する古墳であり、「□始元年」銘の三角縁神獣鏡が出土している。田多地引谷の墳墓からは珠文鏡や鉄製品など豊富な副葬品が出土したが、特に五銖銭は当時の交流を物語る遺物である。

茶臼山古墳は径40m以上の大型円墳であり埴輪を有する。また出石町内には大王の棺とされる長持形石棺の残欠があり、朝来市和田山町所在の池田古墳のものとする説がある。平野や出石川周辺の丘陵尾根上には小規模な古墳が多数築造されている。カヤガ谷古墳群は竪穴系横口式石室という特異な形態をもつ。

1．鳥居城跡
2．鳥居遺跡
3．東谷古墳
4．尾崎古墳群
5．
6．森井山頂古墳群
7．大谷山頂古墳群
8．黒谷古墳群
9．土田古墳群
10．草山古墳群
11．土屋ヶ鼻古墳群
12．虫生山遺跡
13．田多地古墳群
14．安良古墳群
15．下安良城山古墳
16．三開山城
17．嶋遺跡
18．田多地小谷遺跡
19．田多地小谷古墳群
20．田多地引谷墳墓群
21．中通古墳
22．砂入遺跡
23．カヤガ谷古墳群
24．カヤガ谷墳墓群
25．カヤガ谷横穴
26．荒木遺跡
27．篠谷2号墳
28．岩谷古墳群
29．小野小学校裏山遺跡
30．新宮谷古墳群
31．袴狭遺跡
32．大谷墳墓群
33．下坂横穴群
34．坪井遺跡
35．入佐川遺跡
36．御屋敷遺跡
37．此隅山城跡
38．上坂古墳群
39．上坂遺跡
40．出石神社
41．宮内遺跡
42．宮内堀脇遺跡
43．宮内黒田遺跡
44．茶臼山古墳
45．丸山古墳
46．出石城
47．有子山城

第２図　周辺の遺跡

この時期も集落については不明であるが、入佐川沿いの入佐川遺跡では掘立建物が検出され、前期の土器が多量に出土し、至近に集落が存在するものと思われる。

古代

但馬国府および国分寺は豊岡市日高町に所在するが、『日本後期』延暦13（906）年正月壬寅条に「但馬の国治を気多郡高田郷に遷す」とあり、それ以前の国府所在地が存在することになる。その場所は地理・文献などの研究から諸説あり、袴狭遺跡群もその1つである。袴狭遺跡群のうち砂入遺跡、荒木遺跡、袴狭遺跡、入佐川遺跡からは7世紀末～9世紀の建物跡などが検出される。また袴狭遺跡からは木簡や墨書土器、石帯や帯金具、銅印、人形や斎串をはじめとする祭祀具など官衙的色彩の強い遺物が多量に出土している。

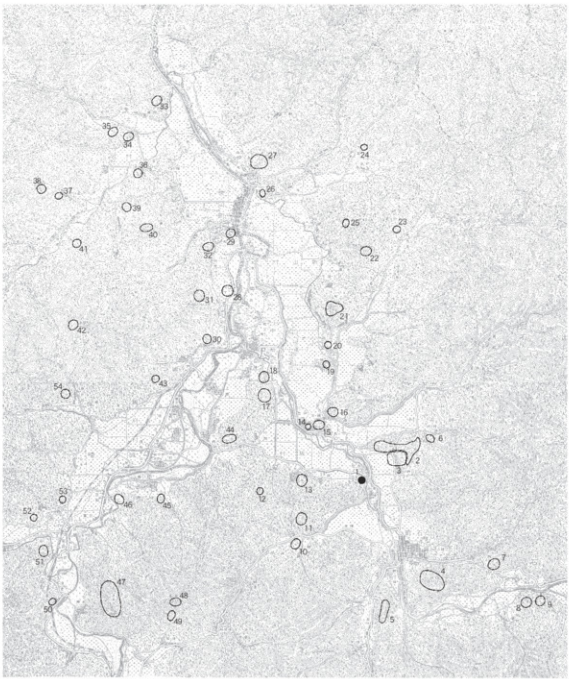
中世

この時期の出石を特色づけるものは守護大名の山名氏である。山名氏は上野国山名郷（群馬県高崎市）を本拠としていたが、1344年に山名時氏が南朝の拠点であった三開山城を攻略し居城とした。これが山名氏の但馬支配の端緒となる。その後但馬に勢力を伸ばして15世紀末に但馬の支配強化のために下向する。その際の拠点となった守護所は文献史料から城崎郡九日市（九日市城）とする説が有力であり、その場所は三開山城の対岸にあたる。ただし守護所そのものの遺構は今のところ確認されていない。守護所推定地背後の丘陵に所在する妙楽寺は中世の有力寺院であったが、城郭化され、守護所の詰城の機能も有していたとされる。

15世紀末に山名氏は守護所を此隅山城とその山麓に移し16世紀後半まで但馬支配の本拠地となる。此隅山城の山麓には守護の館を中心に上級武士の屋敷、寺院が配置されさらにその外側に市場が形成される。宮内堀脇遺跡は守護所の西側について調査し、低湿地を造成して堀や土塁に囲まれた武家屋敷群が造られていることが明らかとなった。此隅山城北麓の袴狭遺跡では16世紀後半の三間堂が検出され、宮内堀脇遺跡出土の位牌に記された人物と同一人物の名が記された卒塔婆が出土し、守護所に住む人々の信仰の場であった。このように此隅山城山麓の状況は考古学的調査により明らかにされつつある。

16世紀後半は山名氏の衰退期である。中国地方の尼子、毛利と織田が台頭する中を揺れ動きながら辛うじて地位を維持していくが、此隅山城は織田信長の但馬侵攻により1569年但馬の諸城とともに落城、山名祐豊は堺へ逃れることになる。その後、祐豊は許しをうけて帰国し居城を有子山城に移した。なお今日残る此隅山城の遺構はこの時期に改修されたものとされる。間もなく但馬の緊張が再び高まり、1580年織田軍が再度但馬に侵攻、有子山城は落城し、山名氏は滅亡、但馬の中世は事実上終わりを告げる。そして織田系の大名が新たな支配者として但馬に入り、既存の城郭を改造する。有子山城は前野長康によって近世城郭に改修される。その後前野氏に変わって出石に入った小出氏により山麓の曲輪は近世出石城となった。

豊岡盆地を取り巻く山塊や丘陵上には多くの山城が所在している。その多くは上記のような時代の流れの中で築城されたものである。南北朝の争乱期に南朝の拠点となった進美寺は城郭化し、戦国期まで改修される。このように中世寺院が城郭化したものとして千眼寺城、浅間寺城がある。これらは構造が近隣に所在する地域領主の城と異なることから、城郭化に際しては地域領主の影響は少なかったことが推定される。山名氏の有力被官の垣屋氏は楽々前城、宵田城、轟城、田結庄氏は鶴城を本拠とし、拠点を中心に活動し山名氏を支えていた。これらの城の周辺には守りを固めるための支城を築いている。この他に軽微な防御施設を有する小規模な城があり、戦乱などを避けるために村・村人が構築した城とされる。



第３図　鳥居城周辺の城館

1 鳥居城	9 桐野子城	17 千眼寺城	25 河谷城	33 森津城	41 岩本城	49 浅間寺城
2 此隅山城	10 細見城	18 加陽城	26 備後衆山城	34 亀ヶ崎城	42 岩井城	50 岩山城
3 宮内堀脇遺跡	11 荒木城	19 上鉢山城	27 鵜山城	35 海老手城	43 水生城	51 宵田城
4 有子山城	12 三木城	20 下鉢山城	28 九日市城	36 福田城	44 引野城	52 弥布城
5 中村城	13 大谷城	21 三間山城	29 豊岡城	37 南殿城	45 上郷城	53 国分寺城
6 待鋏城	14 伊豆城	22 衣笠山城	30 羽水城	38 宮井城	46 伊福城	54 八代城
7 師山城	15 福居城	23 市福城	31 美久仁城	39 尼ヶ城	47 蓮美寺城	
8 桐野城	16 安良城	24 馬路城	32 妙楽寺城	40 高屋城	48 須留岐山城	

第3章　調査の結果

第1節　鳥居城

鳥居城跡は出石町鳥居集落の南側、南西から北東方向にのびる尾根の先端に位置し、城のすぐ東側は出石川へと崖状に落ち込む。出石川との間はかつて出石鉄道の軌道敷であり、その敷設時に斜面を掘削し、その後地すべりなどにより曲輪の東端付近が一部損なわれている。集落と最高所の主郭Ⅰとの比高差は約32mである。

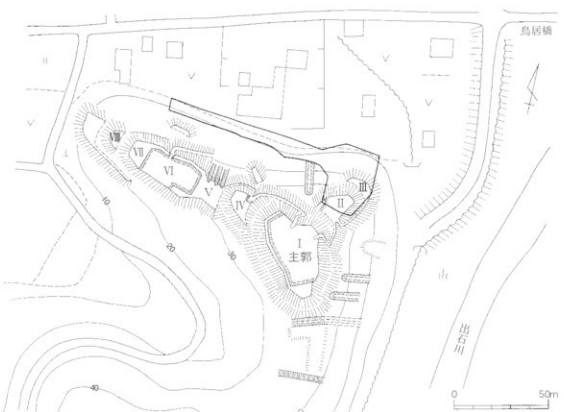
北西側は出石川沿いに広がる平野を経て遠く豊岡市街地を眺望できる。かつての守護所である此隅山城やその麓に築かれた武家屋敷（宮内堀脇遺跡）は北東約１km、またその後の山名氏の居城である有子山城は南東約３kmである。いずれも出石川をはさんで眺望は開け、視界をさえぎるものはない。調査対象地の尾根上は地元では城跡として周知され、西半部の曲輪上にはかつて神社が所在した。

鳥居城跡の調査は1980年頃には兵庫県内の中世城館の悉皆調査がなされたことに始まる。その成果は「兵庫県の中世城館・荘園遺跡」（註１）として公表されているが、「約900㎡の広さをもつ主体部を中心に、その西側には、長さ60mに及ぶ細長い曲輪など５つばかりの曲輪で構成」と簡易な記述があるのみである。

その後、西尾孝昌氏によって縄張りの調査が行われている。それによれば、城跡は南北130m、東西160mを測り、主郭を基点に、２方向にのびる尾根に階段状に曲輪を配した連郭式の小規模な山城である。主郭は南北42m、東西16m、北側と西側は高さ１～1.5m、幅3.5mの折れをもつ土塁で囲まれる。

主郭の南側は11m×８mを測る一段高い平地があり、櫓台を想定。櫓台と堀切の段差は約８mある。

曲輪Ⅴには小規模な畝状竪堀を構築し、曲輪Ⅵ（40m×17m）は南の一部を除いて、高さ１～1.2mの



第４図　鳥居城跡縄張り図と調査区

土塁で囲まれ、櫓台状の曲輪をもつ。土塁に囲まれた一折れの虎口は、幅３ｍを測る。以上のような構造から、鳥居城は山名祐豊が有子山城に入城した天正２(1574)年頃、有子山城の支城群の１つとして築城されたとみられ、豊岡・日高方面から出石に入るルートの監視・防御を担っていたと推定されている（註２）。

註・参考文献

1　「兵庫県の中世城館・荘園遺跡」兵庫県教育委員会　1982年
2　西尾孝昌「出石の城郭（1）」『此隅山城を考える』第４集　1992年

第２節　鳥居城跡の遺構と遺物

今回の調査は、鳥居城北東側斜面から北側山裾を対象とした。調査区東半部は主郭から２方向にのびる尾根のうち北東方向にのびる尾根上にあたり、西尾氏の縄張り図（第４図）中の曲輪Ⅱ、Ⅲとその西側の竪堀を想定されている谷部分の裾部にあたる。

１．曲輪

①曲輪Ⅱ　（図版５・６　写真図版５～７）

主郭Ⅰの下位にあたり、南西－北東方向に主軸をもつ。東西約10m、南北約13mの平坦面は主郭Ⅰから北東にのびる曲輪群の中では最大規模であるが、東端付近は地すべりなどにより損なわれている。現地表の標高は29m前後、麓からの比高差は21.5mである。現状では南東側には主郭Ⅰと結ぶ通路、南西側には曲輪Ⅳから等高線沿いにのびる通路があり、後者の取り付く平坦面南西部隅の調査区外には削り残し土塁が残存する。平坦面の現況での面積は約112㎡である。表土除去後、掘削の各段階で遺構検出を行ったが、遺構は検出できなかった。曲輪の造成は、地山である岩盤を、その上面が４段程度の平坦面になるように大きく掘削して行う。

最上段の平坦面はその上面が標高29.8m前後となるが、大半が調査区外になる。主郭Ⅰへの通路はこの段からのびる。

２段目と３段目の平坦面が曲輪Ⅱの主体となる。２段目は南北4.5m、東西７mの不整長方形を呈し、検出できた面積は約30㎡である。上面は標高29.6～29.3mで北東方向に緩やかに傾斜する。平坦面上に遺構はない。曲輪Ⅳとを結ぶ、現存する山道はこの段に取り付くようである。

３段目は南北４m、東西は現況で６mを測る。検出した面積は約20㎡で標高29.0～28.7mで北東へ傾斜をもつ。２段目との段差の直下に幅30cm、深さ数cmの溝を掘削する。溝沿いには柱穴10基を検出した。規模は径20～30cm、深さ40～60cmである。また北東端付近では径90cmの円形を呈する土坑状の落ち込みを検出した。深さは40cmを測る。これら遺構は盛土上面で検出できなかったことから、掘り込み面は盛土より下である。つまり防御施設としての櫓など曲輪として機能した時期のものではなく、曲輪造成に伴い設置された施設に伴うものと考える。

４段目は東西方向に主軸をもち、東西８m、南北２mを測る。検出できた面積は約13㎡である上面の標高は27.7～27.0mで北東方向へ傾斜するが、27.7m前後で狭い平坦面をもつ。３段目との段差の直下に幅20cm、深さ10cm程度の溝を掘削する。

盛土の断面観察では、これら岩盤を削り出した平坦面上に、掘削時に発生した岩屑を盛り上げて平坦

面を大きくし、最終的に岩屑の含有が少ない土によって仕上げていることが判明した。盛土の厚さは主郭Ⅰよりの南端付近で0.3m、先端付近で0.7mを測る。また曲輪の外縁には赤色土の堆積が見られ、盛土による土塁が巡っていた可能性がある。また曲輪Ⅱ北側の斜面では現地表では確認できなかったが、腰曲輪と考えられる曲輪Ⅱ－２を検出した。

出土遺物

曲輪Ⅱは今回調査した遺構の中で遺物の出土量が最も多かった。その大半は主郭Ⅰ直下となる曲輪の南端の土器だまりからまとまって出土したものである。その他、平坦面上や周辺の斜面で疎らに散布している。その他に東播系須恵器甕・捏鉢などの破片が出土したがそれについては後述する。

ａ.曲輪Ⅱ土器だまり出土遺物

土師器　（図版13　写真図版18～20）

皿が多量に出土し、残存状況のよいものを選択して実測した。

土師器皿は口径から大小に大別でき、さらにその中で大小に細分できる。

小皿

①口径8.4～8.8cm

②口径10cm弱

大皿

①口径11.6～11.8cm

②口径13cm弱

小皿①（１～７）　丸みをもつ底部から体部が内湾ぎみに立ち上がる。口縁端部は丸みをもつものと、ナデにより尖りぎみとなるものがある。

小皿②（８～13）　８は底部は平底状で直線的に体部が上方にのびる。逆台形を呈し、底部と体部の境界が比較的明瞭。10は口縁端部が屈曲ぎみに外反する。11～13は口縁部に油煤痕があり、灯明皿として用いられたもの。この他に確認された灯明皿も全てこの寸法である。口縁端部はナデによりやや外反する。

大皿①（14・15）　器高が５cm前後である。底部は平底状で直線的に体部が上方にのびる。逆台形を呈し、底部と体部の境界が比較的明瞭である。器厚はやや薄い。

大皿②（16・17）　底部がやや丸みをもち体部との境界が不明瞭。口縁端部はやや外反。器厚は厚め。17は平底の底部から体部が斜めに直線的にのびる。器高はいずれも５cm前後である。

耳皿など

18・19は耳皿である。体部から口縁部２ヶ所を内側へ折り曲げる。20は小片で小型の土師器皿と思われるが、外面をナデて仕上げることから、蓋の可能性もある。

磁器　（図版13　写真図版21）

21は青磁細蓮弁文碗、22は白磁碗である。

瓦質土器　（図版13　写真図版21）

23は瓦質土器擂鉢で平底の底部のみ残存する。底部から体部へは直線的に立ち上がるようである。内面に１単位５本以上の擂目がある。

土製品　（図版13　写真図版21）

24は有孔土錘で現長3.2cm、直径1.6cmを測る。

b.曲輪Ⅱ平坦面出土土器

土器だまり以外の曲輪平坦面上から出土したものである。

土師器　（図版14　写真図版18～20）

すべて皿である。径8.8cm前後の小皿と径12cm前後の大皿の２種がある。小皿は、底部が丸みをもち体部との境界が不明瞭である。大皿は27・28の２点。平底ぎみで逆台形を呈する。29は手づくね成形である。丸底で口縁部が短く立ち上がる形態である。径4.8cmを測る。

瓦質土器　（図版14　写真図版21）

30は瓦質土器擂鉢である。斜め上方に直線的にのびる体部から、口縁端部は外へ曲がる。宮内堀脇遺跡のB類に該当するものであろう。

石製品　（図版14　写真図版21）

Ｓ１は砥石である。

鉄製品　（図版13　写真図版21）

Ｍ１・２は鉄釘である。いずれも角釘であるが先端を欠く。断面はM1が一辺0.4cm、M2が0.6cmを測る。

c.曲輪Ⅱ斜面出土土器

曲輪Ⅱの下方斜面から出土したものである。

土師器　（図版14　写真図版20）

皿が出土し、うち３点を図化した。31は灯明皿、復元径10.1cmを測る。平底ぎみの底部から屈曲して斜め上方にのびる。32は逆台形を呈し口縁部はナデ上げる。33は底部を欠くが、丸みをもつものと思われる。復元径は16.7cmと大型である。器高は2.5cm程度になると思われ、器厚は厚い。

②曲輪Ⅱ－２　（図版５　写真図版７）

曲輪Ⅱの西隅付近に位置し、谷に面する。曲輪Ⅱの平坦面と重複し、調査前にはその痕跡を全く確認できなかったため、現況の曲輪Ⅱとは時間差をもつ可能性がある。主軸を南西－北東にもち、ほぼ等高線方向を向く。長さ８ｍ、幅２ｍを測る。検出した平坦面の面積は約10㎡である。斜面を掘削し平坦面を造り出し、山側にコ字状に溝が巡る。床面では柱穴などは検出できなかった。また、遺物も出土していない。

③曲輪Ⅲ　（図版７　写真図版８・９）

曲輪Ⅱの下位にあたり、曲輪Ⅱとの間の斜面の傾斜は約60°である。東西約11ｍ、南北約3.5ｍの平坦面を有し、東西方向に主軸をもつ。当初、曲輪Ⅱの腰曲輪的な機能が想定されていた。地形観察では東側斜面まで帯状に平坦面がのびる可能性もあったが、斜面が崩落する危険があったため調査しえなかった。現況での平坦面の面積は約36㎡である。現地表の標高は23ｍ前後であり、麓からの比高差は15.5ｍである。

曲輪の造成は、地山である岩盤をその上面が３段に平坦面を削り出して行う。

最上段の平坦面は東西約８ｍ、南北0.5ｍの土手状を呈する。上面の標高は24.0ｍ前後である。山側で

小規模な溝、下段との段差沿いで柱穴を検出した。溝は幅30cm、深さ６cm程度である。柱穴は３基検出し、ほぼ一線上に並び列をなす。径15～20cm、深さ20cm程度である。柱穴間の距離は２ｍと１ｍを測る。

２段目は東西13m以上、南北1.7ｍを測り、検出した面積は約28㎡と曲輪Ⅲの中で最も広い。上面の標高は23.8～23.5mである。この段から西側の谷へ犬走り状遺構がのびる。上段との段差沿いで溝状のくぼみ、柱穴を検出した。柱穴は径20～30cm、深さ20～30cmである。上段の柱穴と対応する位置にはなく、列もなさない。

３段目は東西8.5m以上、南北は最大で1.5ｍを測る。検出した面積は約７㎡、標高は23.2m前後であり北へ傾斜をもつ。平坦面上では遺構は検出していない。断面観察では、岩屑混じりの土の堆積は認められるが、整地土の痕跡は認められない。この曲輪は整地土がすでに流失したか、岩盤の削り出しを主体に造成した可能性がある。

出土遺物

曲輪Ⅲ斜面

曲輪Ⅲの下方斜面から出土したものである。

土師器　（図版14　写真図版20）

皿が出土し、うち４点を図化した。34は丸みをもち底部と体部が不明瞭で器厚が厚い。35は34と同寸法だが器厚は薄めである。口縁端部の内面がくぼむ。36は復元径15.9cm、37は復元径18.8cmを測る。いずれも35同様に器厚は薄めで口縁端部の内面がくぼむ。

④曲輪Ⅲ－２　（図版８　写真図版11・12）

曲輪Ⅲの下位にあたり、発掘調査により検出した小規模な曲輪である。調査前の地形観察では、平坦面はなかったものの、標高16m前後で傾斜が緩やかに変換する箇所が確認できた。その範囲は東西約13m、南北約６mを測り、さらに東側へ続くようだが、斜面の崩落により損なわれている。曲輪Ⅲ－２の造成は、地山である岩盤を２段の平坦面に削り出して行う。

上段は東西11.5m以上、南北１ｍを測る。上面の標高は16m前後である。西端から南西斜面上方にのびる犬走り状遺構を検出した。また、中央付近で柱穴を１基検出した。

下段は東西９m以上、南北１ｍを測る。上面の標高は15.3～15.1mである。平坦面上では遺構は検出できなかったが、西端から南西斜面下方にのびる犬走り状遺構を検出した。

盛土の断面観察では、曲輪Ⅱと同様、平坦面上に岩盤を掘削時に発生した岩屑を盛り上げて平坦面を大きくし、最終的に岩屑を含まない土によって整地している。なお、曲輪後方は約45°の傾斜をもつが、比較的平滑であり、斜面の岩盤を加工している可能性がある。

⑤曲輪Ⅳ－２　（図版12　写真図版13）

中区の北に張り出した尾根の先端付近の岩盤上で平坦面を検出した。調査前の地形観察では平坦面は確認できなかった。曲輪Ⅳの北側下方に位置し、東側は谷を挟んで曲輪Ⅱ～Ⅲ－２と対峙し、西側には竪堀１が所在する。平坦面は東西方向に主軸をもち、東西5.7m、南北1.2mを測る。検出した面積は5.6㎡である。標高は13.0m前後である。断面観察では明瞭な盛土や整地層は認められない。岩盤上では整跡など人為的な所作を示す加工痕などは認められない。

2．竪堀

竪堀１　（図版11　写真図版14・15）

中区の小規模な尾根張り出しの西側で、竪堀の下端を検出した。規模は、幅・深さともに2.2mを測り、両側面はほぼ垂直に立ち上がる。底部は平坦で、標高は9.5m前後である。掘削した部分の岩盤は周囲よりも軟質であり、岩盤の中でも掘削しやすい部分を探して設置したようである。掘部は平面形がハ字状に広がり、底もテラス状に平坦となる。底の標高は8.2m前後を測る。

なお尾根上の曲輪Ⅴから下方に畝状竪堀が確認でき、このうち主郭Ⅰ寄りの堀が検出した竪堀の延長上にあたることから、尾根から山裾まで堀を掘削していたものと考える。断面観察では竪堀埋土は旧表土層と赤色土層の互層となっており、人為的に埋められたものと推定する。埋土中層からは完形の土師器皿が２点出土している。また中層から出土した炭化物については放射性炭素年代測定をおこなった。その成果は第４章として掲載している。

竪堀２　（図版10　写真図版15）

竪堀１の西側約2.5mで検出した。長さ２m、幅1.1mで岩盤がくぼむが上方までは続かない。深さは0.5m前後、底の幅は0.7mを測る。鑿跡など明瞭な加工痕は認められないが、人為的に掘り込んだものの可能性があり、堅い岩盤上であることから掘削を断念したと推定される。

3．その他の遺構

主郭Ⅰから北へのびる谷部は、西尾氏の縄張り調査では竪堀が想定されている。今回の調査区はその掘部のみを調査の対象としたが竪堀の掘などの遺構や地山を整形した痕跡は確認できなかった。ただし九十九折状に東側の尾根上の曲輪群を連絡する通路の折り返し部分がこの谷である可能性があり、谷筋に通路などが存在していたことは十分考えられる。

通路　（図版９　写真図版13）

竪堀２の西側で検出した。幅0.7mで岩盤を階段状に削り込む。山側には幅20cm、深さ10cm程の溝がつく。曲輪Ⅵにはかつて神社が所在したため、その参道として整備されたものと思われるが、もともとあった山裾から曲輪への通路を踏襲している可能性がある。

第３節　その他の時期の遺構と遺物

木棺墓　（第５図　写真図版16）

中区の東向斜面で木棺墓を検出した。遺構は岩盤上、標高約14.5m付近でテラス状に傾斜が変換する地点に築造される。表土直下で岩盤となり、すでに墓壙の大半は流失したとみられるが、小口側には棺の小口押さえと思われる礫が検出された。礫の検出位置から、棺は南西－北東方向に主軸をもち、規模は、長さ1.55m、幅0.4mと推定される。また棺の南隅付近から切先を南西方向に向けた状態で鉄剣が１点出土している。副葬品に乏しいが古墳時代のものと推定する。

出土遺物

鉄剣（Ｍ３）は現存長31.2cm、刃幅2.6cmを測る。直角関を両側に持って茎部へ続くが茎部の大半を欠く。刃部の断面はレンズ状を呈し、最大厚0.45cmを測る。木質、布痕は確認できない。

その他

城関連以外の遺構としては木棺墓が検出されたのみだが、出土遺物から想定される遺構がある。

曲輪Ⅱ斜面から須恵器捏鉢（40）・甕（41）が出土している。40は口縁端部を上方に拡張する。なお図化しえないが捏鉢の破片がもう１個体分出土している。41は胴部が丸みをもち、口縁部を短く屈曲させ端部は上下に拡張する。いずれも13世紀代であろう。比較的残存状態のよい捏鉢と甕の出土から、これらは経筒外容器の身と蓋のセットになるものと思われ、曲輪Ⅱの所在する尾根上に経塚が所在した可能性が高い。遺構そのものは検出されず、築城に際し破壊されたものと推定する。42は平高台の底部で、糸切りである。

第５図　木棺墓

43は樽形廻である。曲輪Ⅱ平坦面より出土した。樽形廻は田辺編年ＴＫ208以降消失するため、それ以前に位置付けられる。その他図化しえなかった遺物として中区の尾根上より須恵器高杯片、西区の山裾より須恵器甕片が出土した。樽形廻の出土から主郭Ⅰあるいは曲輪Ⅱに５世紀代までさかのぼりうる古墳が所在した可能性が高く、その他にも尾根上に複数の古墳が所在していたものと推定できる。しかし尾根上の大半が調査対象地外のためその痕跡の有無などは明らかでない。

44は弥生土器高杯の脚部である。脚部裾はゆるやかに開く。外面はナデにより仕上げる。なお図化しえない遺物として曲輪Ⅱ斜面から複合口縁壺の破片が出土している。古墳と同様に尾根上に弥生時代末の墳墓が存在したと思われる。城跡南側の尾根上には階段状に墳墓あるいは古墳が多数築造され、城跡となった尾根の先端部にも複数の墳墓・古墳が所在したことが確実である。

Ｓ２は舟形の光背をもつ石仏である。坐像を浮き彫りしたもので細部は表現されていない。下部の約1/3は未調整であり、地中に埋め込んだものである。付近にはこの他にも石仏があり信仰の対象となっていたとのことであるが、水害の際に消失したとのことである。また、出石川沿いの山裾にも出石鉄道敷設時に石造物片が出土したと伝えられ、現在も鉄道敷跡のそばに安置されている。いずれも中世以降に属するものであるが、城に直接関連する遺物ではないであろう。

第4章　自然科学分析

放射性炭素年代測定（AMS）

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

1. はじめに

豊岡市出石町鳥居に位置する鳥居城跡は、山名祐豊が有子山城に入城した天正2年(1574年)頃に、有子山城の支城群の一つとして築城された山城の跡と見られている。当城跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。調査区は鳥居城北東側斜面から北側山裾にあたり、試料は調査区内中区西寄りの斜面下端付近で検出された竪堀１の、埋土中層より出土した炭化材である。竪堀埋土は旧表土層と赤色土層の互層となっており、人為的に埋められたものと推定される。

第１表　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-14742	調査区：中区西側 遺　構：竪堀 層　位：中層	試料の種類：炭化材 (広葉樹・散孔材) 試料の性状：不明 状態：wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N）

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、^{14}C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比(δ^{13}C)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した^{14}C年代、^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代(yrBP)の算出には、^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した^{14}C年代誤差(±1σ)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}Cの半減期5730±40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ：INTCAL04)を使用した。なお、1σ暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第2表　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP±1σ)	^{14}C年代 (yrBP±1σ)	14年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-14742	-25.85 ± 0.14	814 ± 19	815 ± 20	1218AD(68.2%)1254AD	1186AD(95.4%)1266AD

4.　考察

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。

測定の結果、1σ暦年代範囲で1218-1254calAD、2σ暦年代範囲で1186-1266calADとなり、12世紀末～13世紀中頃の範囲を示した。この値は推定されている築城年代とは大きな隔たりがある。測定試料は最外年輪が確認されておらず、実際の伐採年代は得られた年代よりも新しい可能性がある(古木効果)。とはいえ、試料の年輪幅や状態を見る限り、数百年もさかのぼるとは考え難い。一方、調査区からは東播系須恵器鉢・甕も出土しており、曲輪等の城構築の際に経塚が破壊されたと考えられている。このことから、竪堀の埋め戻しに使用した土に古い炭化材が混ざっていた可能性も考えられる。

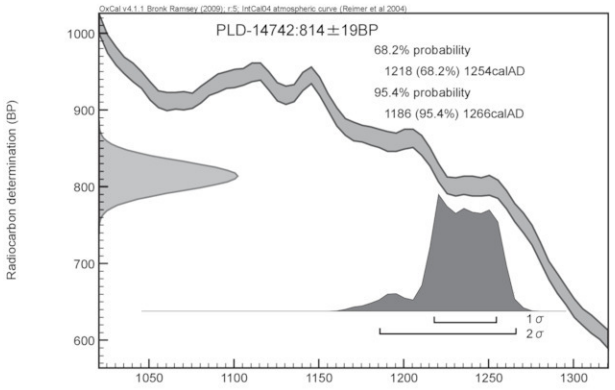
参考文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代, 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.


OxCal v4.1.1 Bronk Ramsey (2009); r:5; IntCal04 atmospheric curve (Reimer et al 2004)
PLD-14742:814±19BP
68.2% probability
1218 (68.2%) 1254calAD
95.4% probability
1186 (95.4%) 1266calAD
1σ
2σ
Radiocarbon determination (BP)
Calibrated date (calAD)

第６図　暦年較正結果

第5章　総　括

城館の調査は地表に現れた遺構を詳細に観察する縄張り調査が主流である。ただし城館は機能していく上で、必要に応じて改修されるため、現存する遺構はその最終形態といえる。一方で発掘調査の多くは遺跡の消滅と引き換えに解剖学的にアプローチしている。今回の調査でも地表に痕跡を残す遺構の他に埋没した曲輪と竪堀を検出し、その存在を明らかにした。また竪堀１は埋土の状態から人為的に埋め戻された可能性が高いことが判明した。

但馬地域では西尾孝昌氏らにより城館の縄張り調査が行われ資料化がなされている。その中で竪堀に着目して、但馬の戦国期城郭の編年を行っている（註１）。

① 堀切＋竪堀（U字形堀切）をもたない城　　天正２年以前
② 堀切＋竪堀（U字形堀切）をもつ城　　天正２年
③ 畝状竪堀・放射状竪堀をもつ城　　天正３～５年
④ 横堀＋畝状竪堀をもつ城　　天正６～８年

そして鳥居城の構築には２段階が考えられ、第１は主郭を中心に階段状に曲輪を配した時期、第２の段階は、土塁・竪堀・虎口などで改修された時期で、1575～1577（天正３～５）年と想定された（註２）。上記の段階設定に今回の調査成果を加えると、時期不明ながら竪堀１を埋めた段階を追加することができるだろう。

また今回の調査では曲輪の造成の様相が明らかとなった。最も広い曲輪Ⅱは盛土下部に旧表土層が部分的に残存していた。これから類推するとこの箇所は当初はテラス状の緩斜面であったとみられ、これを水平に近く削り込み、発生した土砂を選別した後に盛土を行ったと思われる。この際の造成は礫層を多く含む盛土層と、礫層の少ない整地層の上下セットで行われている。盛土の断割断面観察では、このセットの整地が上下２面確認でき、以下の２段階の構築時期を想定することが可能性かと考える。

①２段目の平坦面を岩盤を削り出して造り、北端を盛土により拡張する段階。
②さらに盛土により平坦面の拡張を行い、現況の平坦面となる段階。

①の段階には曲輪Ⅱ－２と併存していた可能性があり、②の段階で曲輪の拡張とともに曲輪Ⅱ－２の埋め立てがなされる。②の段階には先端付近には盛土により土塁を構築した可能性がある。平坦面上および土器だまりから出土した遺物は②の時期のものである。

曲輪Ⅲ－２についても曲輪Ⅱと同様の盛土がなされ、平坦面を造成する。これには上方斜面を約45°の傾斜に削り込み、その発生土を整地に用いた可能性がある。ただし曲輪の改修は行われない。このように平坦面の盛土と斜面の加工を行った結果、尾根上を可能な限り広く有効に使うと同時に土盛り・切岸により防御性を高めることとなる。

次に曲輪Ⅱにみられる２段階の造成と、西尾氏の想定する２段階の構築について、出土遺物から検討してみたい。

出土遺物の主体をなすものは土師器皿である。皿はすべて手づくねによるものであるが、内面をナデ、外面は指おさえの後口縁部をナデで仕上げたもので、いわゆる京都系土師器皿として把握できるものであろう。そこから想定できるのは消費者の京都への指向の強さである。但馬は城館などから出土す

る土師器皿は京都系といわゆる手づくねが混在する地域（註３）であるが、後者は国衙などの城から出土する傾向にあり（註４）、この点からみれば鳥居城跡は京都への指向の強い、具体的には山名氏に関連する城といえよう。

曲輪Ⅱ土器だまり出土の土師器皿を概観すると、丸底と平底のものが混在し、器厚はやや厚めである。おおまかな時期としては16世紀後半とすることが可能かと考える。径を復元できたものは８～10cmと11～12cmの２種に大別でき、径15cmを越える大型の皿は確認できない。

山名氏関連の武家屋敷などを調査した宮内堀脇遺跡からは多量の土器が出土しているが、火災焼土層、紀年銘木簡、人名と文献史料を照合し、時代設定がなされている（註５）。これによれば土師器皿は天文年間～永禄前期（中世２～３期：15世紀半ば）を最盛期とし、以後山名氏の衰退と軌を一にするように法量の縮小と使用量の減少が認められる。曲輪Ⅱ上の遺物は大型の皿が認められず、法量の縮小が進んだ時期のものとみることができ、此隅山城落城後のものである可能性がある。これは西尾氏が想定した２段階の構築のうち、第２の段階、「土塁・竪堀・虎口などで改修された時期で、1575～1577（天正３～５）年」（註６）に該当するとみられ、有子山城に伴う支城ということと矛盾はしない。

次に西尾氏の想定した第１の段階「主郭を中心に階段状に曲輪を配した時期」（註７）について検討してみたい。曲輪Ⅱについては、前述のとおり少なくとも１回の改修が行われた可能性がある。この改修前の曲輪に伴う遺物は明確に取り上げできなかったが、曲輪Ⅲ斜面出土の皿に注目したい。斜面の流土層から出土したものであるが、器厚が薄手で、口縁端部の内面がナデによりくぼみをもつ一群で、曲輪Ⅱ平坦面・土器だまり出土のものと様相が異なる。曲輪Ⅱでは見られない径15cmを越える大型の皿が複数出土している。宮内堀脇遺跡では径15cm以上の皿は永禄後期（中世５期：～1569年）までに消滅するとされる（註８）。これら遺物を改修された曲輪Ⅱをさかのぼるものと積極的に評価するならば、鳥居城の築城は此隅山城落城以前とすることができ、当初は此隅山城に伴う支城として築城されたことが考えられる。16世紀の山名氏は弱体化する中で国内では配下の国衆が山名氏との確執を経て自立しつつある状況であり、さらに中国地方の毛利、畿内の織田の外圧にさらされることとなった。鳥居城跡の北麓には有力国衆であった垣屋氏の本拠である日高町方面から出石神社にいたる街道が通過している。この街道の監視と、出石川渡河地点の防御のために鳥居城は築城されたのであろうか。城跡から尾根をたどると標高200m程のピークに至るが主郭南側にある堀切以南には城に関連する遺構は認められない。尾根の先端のみを利用した小規模な城郭であるのは、この城が拠点ではなく、支城として機能が特化されていたためかもしれない。

此隅山城落城後、当主山名祐豊は堺へ逃れるが、その後許しをえて但馬に戻ることができ、1574（天正２）年に居城を有子山城へ移す。この際、有子山城防衛のために此隅山城の改修が行われたことが竪堀などの存在から想定されている（註９）。鳥居城跡の改修もこれと軌を一にして行われたと思われ、竪堀の掘削や土塁の構築など防御力の強化がなされたのであろう。鳥居城は有子山城の防衛ラインの一角をなし、出石川流域の平野部から豊岡まで遠望できる利点を生かすとともに、山塊により有子山城からは完全な死角となる日高方面からの街道の監視と防御を担うこととなったのであろう。1580（天正８）年織田軍の第２次但馬侵攻により有子山城は落城、山名氏は滅亡する。この時をもって鳥居城の歴史もピリオドが打たれたと思われる。

その後の改変として竪堀１の埋立てが考えられる。その時期については調査結果からは明らかにしえないが推測してみたい。有子山城は落城後に羽柴秀長が入り改修が行われている。織田軍は継続して鳥

取侵攻、また但馬西部では一揆の鎮圧が行われ（註10）、但馬地域の緊張状態は1581（天正９）年頃まで継続している。この緊張下で鳥居城も再び防御拠点として手が入った可能性もあるが、竪堀１の調査範囲が限定されること、それを物語る遺物の出土がないため、想像の域を出ない。あるいは後世に曲輪Ⅵ上に神社が建てられた際に通路を参道として整備した際に埋め立てたことも否定できない。

おわりに

今回の調査区は城跡の北麓付近に限定され、一部の曲輪を調査しただけである。土器の時期設定の基準とした宮内堀脇遺跡は此隅山城落城に伴い機能を失っていることなどから、鳥居城跡の時代設定には多分に流動的な面を含んでいる。なによりも此隅山城落城から有子山城築城、さらに落城まで歴史は劇的に展開するが、その期間は約10年と短い。しかし限られた調査の中で発掘調査の成果が縄張り調査の成果を補完することができたのは収穫であったといえる。

註・参考文献

1　西尾孝昌「此隅山城の縄張り調査を終えて」『此隅山城を考える』第５集　出石有子山城・此隅山城の保存を進める会　1994年
2　西尾孝昌「出石の城郭（１）」『此隅山城を考える』第４集　出石有子山城・此隅山城の保存を進める会　1992年
3　中井淳史「室町・戦国期における近畿地方の土師器皿」『中近世土器の基礎研究』ⅩⅣ　日本中世土器研究会　1999年
4　山上雅弘氏のご教示による
5　岡田章一「第１節　出土土器・陶磁器の検討」『宮内堀脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第365冊　兵庫県教育委員会　2009年
6　前掲註２
7　前掲註２
8　前掲註５
9　前掲註１
10　西尾孝昌「「小代一揆」と秀吉」『年刊・但馬史研究』第31号　但馬史研究会　2008年

第７図　工事の進む鳥居城跡付近

第３表　土器観察表

報告No.	種別	器種	出土地区	遺構	層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	腹径（cm）	残存	
										口縁部	底部
1	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(8.6)	(1.8)			1/4	
2	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	8.8	1.9				
3	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(8.7)	(1.8)	(3.6)		1/3	1/2
4	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(8.4)	(2.2)			1/3	
5	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	8.4	1.6			2/3	完存
6	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(8.4)	(1.6)			1/3 強	
7	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	8.6	1.9			3/4	完存
8	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり		(9.8)	(2.1)	(4.4)		1/4	1/3
9	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(9.8)	(1.8)	(4.6)		1/3	1/4
10	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(9.6)	(2.3)	(4.4)		1/5	1/4
11	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり		(9.8)	(1.9)	(4.8)		1/4	1/3
12	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(9.9)	(2.5)			1/2 弱	1/2
13	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(9.6)	(2.1)			1/3	
14	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(11.6)	(1.9)	(5.0)		1/4	1/4
15	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(11.8)	(2.1)	(6.9)		1/5	1/3
16	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(12.8)	(2.3)			1/4	
17	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(13.0)	(2.4)			1/4	1/4
18	土師器	耳皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(1.9)	(1.4)			1/2	1/2
19	土師器	耳皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(2.1)	(1.4)			2/3	1/2完存
20	土師器	蓋	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下		1.4			1/12	
21	青磁	碗	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(14.6)	(3.3)			1/14	
22	白磁	碗	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	(12.8)	(2.1)			1/12	
23	瓦質土器	擂鉢底部	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下		(2.1)	(12.0)			1/7
24	土師器	有孔土錘	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	長 3.2	幅 1.6	厚 1.6	重 7.5g		
25	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり		(8.9)	(1.8)			1/2 弱	1/2 弱
26	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり		(8.8)	(1.9)			1/2 弱	1/3
27	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ土器だまり		(11.8)	(2.1)			1/4	1/3
28	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ平坦面中央		(12.1)	(2.4)	(6.2)		1/4	1/4
29	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ平坦面中央		(4.8)	(1.5)			1/3	完存
30	瓦質土器	擂鉢	東区			(35.8)	(5.6)			1/14	

報告No.	種別	器種	出土地区	遺構	層位	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	腹径（cm）	残存	
										口縁部	底部
31	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ西斜面	表土直下	(10.1)	(2.2)			1/2 弱	1/2 弱
32	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ北側斜面		(13.8)	(2.4)			1/5	1/3
33	土師器	皿	東区	曲輪Ⅱ西斜面	表土直下	(16.7)	(2.6)			1/6	
34	土師器	皿	東区	曲輪Ⅲ西斜面	表土直下	(13.8)	(2.2)			1/4	1/3
35	土師器	皿	東区	曲輪Ⅲ西斜面		(13.9)	(2.1)			1/7	1/3
36	土師器	皿	東区	曲輪Ⅲ西斜面		(15.9)	(2.4)			1/14	1/6
37	土師器	皿	東区	曲輪Ⅲ西斜面		(18.8)	(2.4)			1/5	
38	土師器	皿	中区西	堅堀 1	中層	8.4	2.0				
39	土師器	皿	中区西	堅堀 1	中層	10.1	2.1				
40	須恵器	捏鉢	東区	曲輪Ⅱ北西部・北西部・北側斜面	盛土・表土直下	(23.0)	(8.5)	8.7		1/3	一部欠
41	須恵器	甕	東区	曲輪Ⅱ東斜面	盛土	(18.5)	(16.1)		(28.3)	1/9	
42	須恵器	底部	東区	曲輪Ⅲ西斜面	表土直下		(2.1)	5.7			完存
43	須恵器	鉢形	東区	曲輪Ⅱ平坦面西端	表土直下		(15.5)				
44	土師器	脚部	西区東半				(4.3)	7.8			完存

第４表　石製品観察表

報告No.	種別	器種	出土地区	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）
S1	石製品	砥石	東区	曲輪Ⅱ中央部	盛土	6.3	3.7	1.1	43.4
S2	石製品	板碑形石仏	西区東半山裾			26.0	14.3	7.2	3100

第５表　鉄製品観察表

報告No.	種別	器種	出土地区	遺構	層位	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）
M1	鉄製品	釘	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	2.2	1.0	0.3	0.7
M2	鉄製品	釘	東区	曲輪Ⅱ土器だまり	表土直下	4.2	1.2	0.6	5.0
M3	鉄製品	剣	中区	木棺墓		31.2	3.3	0.45 ～ 0.6	97.5

報 告 書 抄 録

ふりがな	とりい
書　　名	鳥居城跡
副 書 名	一般国道 482 号鳥居橋橋梁整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第 392 冊
編 著 者 名	長濱誠司 ・ 岸本一宏 ・ （株）パレオ・ラボ
編 集 機 関	兵庫県立考古博物館
所 在 地	〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中 1 丁目 1 番 1 号
発 行 機 関	兵庫県教育委員会
所 在 地	〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通 5 丁目 10 番 1 号
発行年月日	西暦 2011（平成 23）年 3 月 24 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とりい 鳥居城跡	兵庫県豊岡市 出石町鳥居	28561	620232	35° 28′ 51″	134° 51′ 35″	2008.11.17 ～ 2009.1.30	1,344㎡	一般国道 482 号鳥居橋橋梁整備事業に伴う

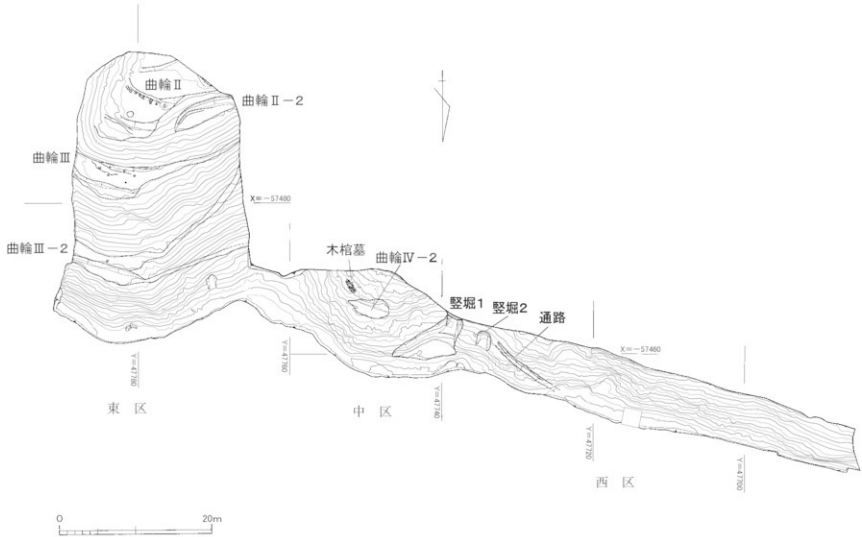
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳥居城跡	城館 墳墓	中世 古墳時代	曲輪・竪堀 木棺墓	土師器・陶磁器 鉄剣	

要　約

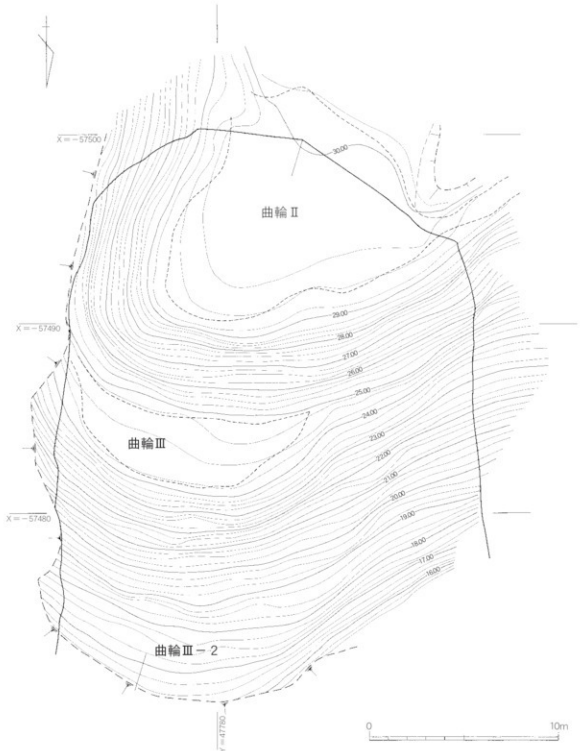
出石川沿いに築城された山名氏の居城有子山城の支城とされる。発掘調査は橋梁架け替えに伴う道路新設工事に起因する。対象地東半部では主郭に連なる曲輪を、西半部では竪堀の裾を検出した。検出した遺構の重複関係や土層観察から、曲輪などに改修が行われていることが判明した。

また弥生時代末、古墳時代中期、鎌倉時代の土器が出土し、尾根上には築城以前に墳墓・古墳、経塚が存在していた可能性が高い。

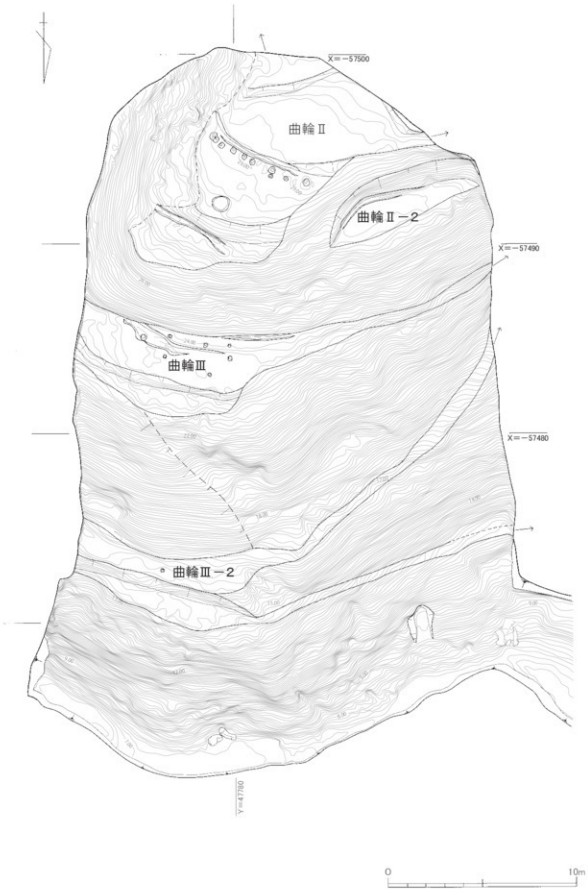
図　　版


曲輪Ⅱ
曲輪Ⅱ－2
曲輪Ⅲ
曲輪Ⅲ－2
X＝－57480
木棺墓
曲輪Ⅳ－2
竪堀1
竪堀2
通路
X＝－57460
Y＝47780
Y＝47760
Y＝47740
Y＝47720
Y＝47700
東　区
中　区
西　区
0
20m

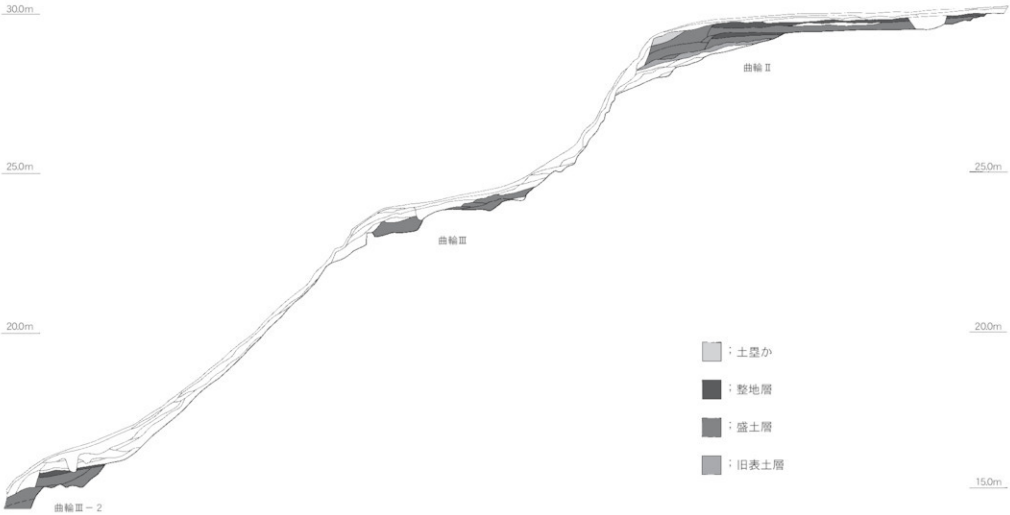
調査区全体図


X＝－57500
X＝－57490
X＝－57480
Y＝47780
曲輪Ⅱ
曲輪Ⅲ
曲輪Ⅲ－２
30.00
29.00
28.00
27.00
26.00
25.00
24.00
23.00
22.00
21.00
20.00
19.00
18.00
17.00
16.00
0
10m

東区調査前地形図

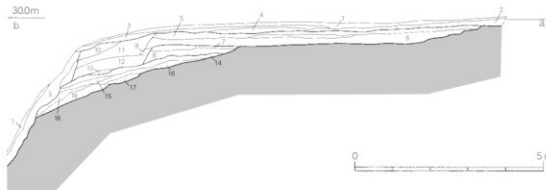


東区遺構図


30.0m
25.0m
20.0m
曲輪Ⅱ
曲輪Ⅲ
曲輪Ⅲ－2
：土塁か
：整地層
：盛土層
：旧表土層
25.0m
20.0m
15.0m
0
6m

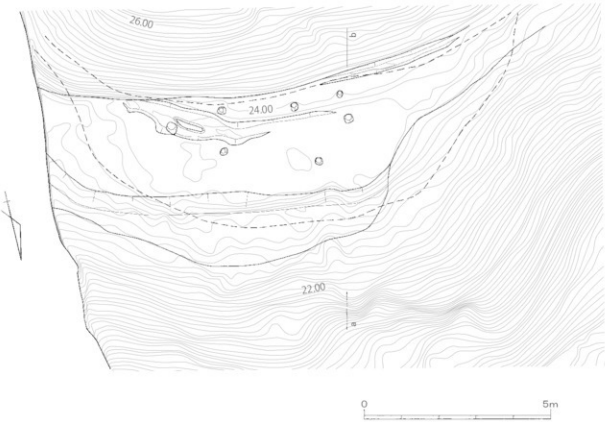
東区断面図

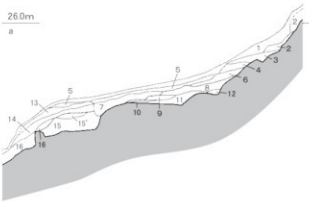
曲輪Ⅱ　平面図



1．表土（腐植土）			
2．10YR5/3	にぶい黄褐	シルト質細砂	土壌化（土師器小皿片多量に包含）
3．7.5YR5/3	にぶい褐	シルト質細砂	土壌化
4．10YR7/6	明黄褐	シルト質細砂	粗砂・細礫混 しまり弱い やや土壌化
5．2.5Y7/6	明黄褐	シルト質細砂	細礫混 岩盤片少量混（整地土か）
5'．2.5Y7/6	明黄褐	シルト質細砂	礫（岩盤細片）多量混（整地土か）
6．10YR7/4	にぶい黄橙	シルト質細砂	10cm 以下の角礫（岩盤片）多量混（盛土）
7．2.5YR8/6	黄	岩盤細片	よくしまる整地土？ 部分的に5YR5/6明赤黄褐シルト質細砂混
8．10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質細砂～中砂	15cm 以下の角礫（岩盤片）混
9．7.5YR7/8	黄橙	シルト質細砂	細礫混
10．5YR4/8	赤褐	シルト質細砂～極細砂	しまり弱い/5精良（土塁盛土か）
11．10YR7/8	黄橙	シルト質細砂～中砂	10cm 以下の角礫（岩盤片）多量混（盛土か）
12．10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質細砂	10cm 以下の角礫（岩盤片）多量混（盛土か）
13．10YR7/8	黄橙	シルト質細砂	岩盤細片混
14．7.5YR5/2	灰褐	シルト質極細砂	5cm 以下の角礫（岩盤片）混 旧表土？
15．10YR7/8	黄橙	シルト質細砂	細礫少量混
16．10YR7/6	明黄褐	シルト質細砂～中砂	細礫少量混
17．10YR5/2	灰黄褐	シルト質細砂～極細砂	岩盤片少量混 土壌化
18．7.5YR5/3	にぶい褐	シルト質極細砂	岩盤片少量混 土壌化
19．7.5YR3/1	黒褐	シルト	クロボクの2次堆積

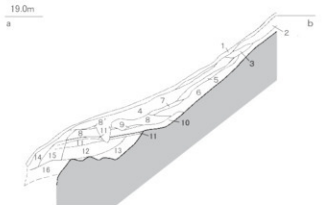
曲輪Ⅱ　断面図





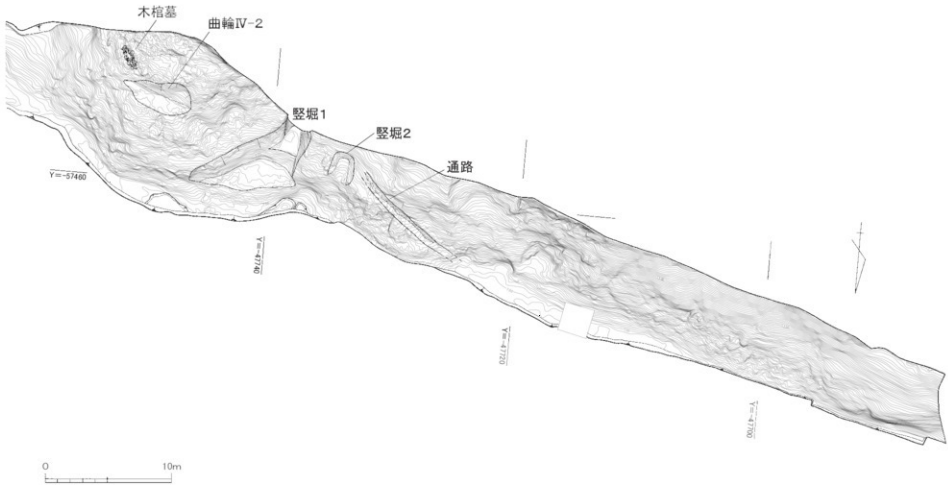
1. 表土(腐植土)
2. 7.5YR5/3　にぶい褐　シルト質細砂　土壌化
2'. 7.5YR5/4　にぶい褐　シルト質細砂　岩盤細片多量混
3. 10YR5/4　にぶい黄褐　細砂　礫多量混(岩盤片)　やや土壌化
4. 10YR7/6　明黄褐　シルト質細砂　(岩盤細片)
5. 7.5YR6/4　にぶい橙　シルト質細砂～極細砂　ややしまりあり　岩盤片混
6. 5YR4/8　赤褐　シルト～シルト質極細砂　岩盤片少量混
7. 7.5YR6/6　橙　シルト質極細砂　岩盤片の混入ほとんどなし　やや土壌化
8. 10YR7/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂～細砂　岩盤片多量混　岩盤を切り崩した層か
9. 10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂　岩盤片混
10. 10YR6/4　にぶい黄橙　シルト質細砂　岩盤細片混　よくしまる　整地土か
11. 10YR6/2　灰黄褐　シルト質細砂　10cm大以下の岩盤片多量混　盛土か
12. 7.5YR5/3　にぶい褐　シルト質極細砂　岩盤片混　構理土か
13. 7.5YR5/3　にぶい褐　シルト質細砂　5cm以下の角礫混
14. 7.5YR3/1　黒褐　シルト質細砂～極細砂　5cm以下の角礫混　土壌化　旧表土か
15. 10YR6/6　明黄褐　細砂　10cm以下の角礫多量混
15'. 10YR6/4　にぶい黄橙　シルト質細砂　細礫多量混
16. 10YR7/4　にぶい黄橙　シルト質細砂　細礫混

曲輪Ⅲ　平面・断面図



1.表土(腐植土)			
2.10YR5/2	灰黄褐	シルト～極細砂	土壌化　細礫混
3.10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質細砂～極細砂	やや土壌化　細礫混
4.10YR5/2	灰黄褐	シルト質極細砂	5cm以下の角礫混　土壌化
5.10YR5/1	褐灰	シルト～極細砂	細礫混　土壌化　旧表土か
6.2.5Y8/6	黄	中砂～細礫	風化パイラン層か
7.10YR8/4	浅黄橙	細礫	岩盤細片
8.10YR5/3	にぶい黄褐	シルト質細砂	5cm以下の角礫多量混
8'.10YR7/4	にぶい黄橙	シルト質極細砂	しまり弱い　細礫混
9.2.5Y7/6	明黄褐	細礫	破砕した岩盤
10.10YR6/2	灰黄褐	シルト質極細砂	岩盤細片多量混
11.2.5Y8/3	淡黄	細礫	破砕した岩盤　整地層か
11'.10YR6/6	明黄褐	シルト質細砂	細礫多量混
12.10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質極細砂	5cm以下の角礫多量混
13.2.5Y6/2	灰黄	シルト質細砂～極細砂	岩盤片多量混　比較的しまる
14.10YR5/3	にぶい黄褐	シルト質細砂	やや土壌化　細礫混
15.10YR6/6	明黄褐	シルト質細砂～極細砂	10cm以下の角礫混
16.2.5Y7/3	淡黄	シルト質細砂	10cm以下の角礫多量混

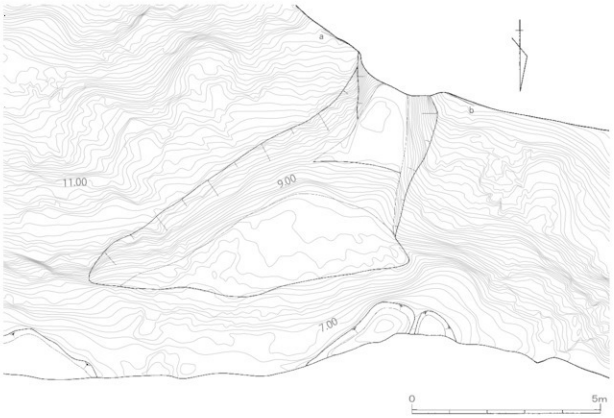
曲輪Ⅲ－２　平面・断面図

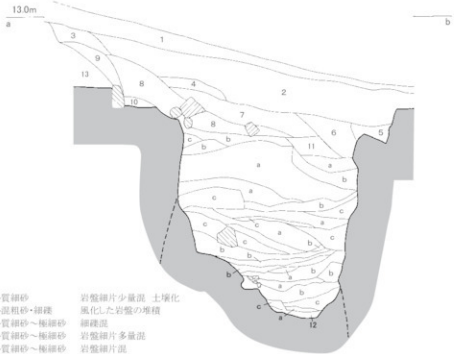


中区～西区全体図

竪堀1
竪堀2
曲輪Ⅳ-2
木柵跡
X=-5470
X=-5460
Y=47760
Y=47750
Y=47740
10.00
11.00
12.00
0
6m

中区遺構図





1．表土(腐植土)
2．7.5YR5/3　にぶい褐　シルト質細砂　岩盤細片少量混 土壌化
3．10YR7/3　にぶい黄橙　シルト混粗砂・細礫　風化した岩盤の堆積
4．10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～極細砂　細礫混
5．10YR6/4　にぶい黄橙　シルト質細砂～極細砂　岩盤細片多量混
6．10YR5/2　灰黄褐　シルト質細砂～極細砂　岩盤細片混
7．10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂　岩盤細片多量混
8．10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～極細砂　30cm以下の礫混 土壌化
9．10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂　風化した岩盤片混
10．10YR6/4　にぶい黄橙　シルト質極細砂　よくしまる(風化した岩盤か)
11．10YR6/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～極細砂　10cm以下の礫混
12．7.5YR6/8+2.5YR4/8　粘土　岩盤の風化したものか
13．10YR7/6　明黄褐　細礫　風化した岩盤の堆積

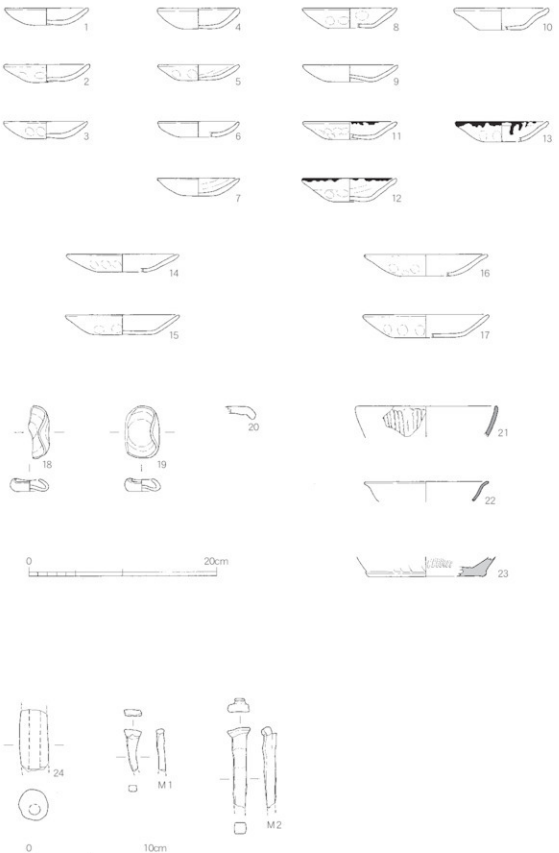
a．7.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂　土壌化 旧表土か
b．2.5Y7/6　明黄褐～5Y6/6橙　軟岩を破砕した細片の堆積
c．10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質細砂～極細砂　多量の礫片混

竪堀１　平面・断面図

1．表土（腐植土）			
2．7.5YR6/6	橙	細砂～極細砂	小礫混
3．7.5YR5/2	灰褐	極細砂	旧表土か
4．7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂	風化した岩盤細片混
5．2.5Y8/6	黄	細砂	準大礫多量混（岩盤片）
6．10YR6/4	にぶい黄橙	細砂～極細砂	岩盤片多量混
7．10YR5/4	にぶい黄褐	細砂～極細砂	岩盤細片多量混　土壌化
8．礫層（岩盤から剥離したものが集積）			
9．10YR5/2	灰黄褐	シルト質細砂～極細砂	礫（岩盤片）混　土壌化
10．2.5Y4/1	黄灰	シルト質細砂	岩盤細片多量混
11．10YR4/1	褐灰	シルト質細砂～極細砂	岩盤細片少量混　土壌化
12．10YR6/4	にぶい黄橙	シルト質細砂～極細砂	岩盤細片少量混
13．10YR5/3	にぶい黄褐	シルト質細砂～極細砂	岩盤細片少量混　土壌化

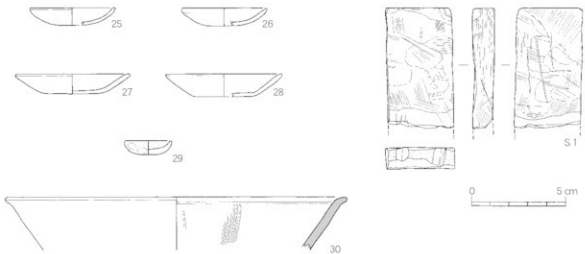
曲輪Ⅳ－２　付近断面図

曲輪Ⅱ　土器だまり

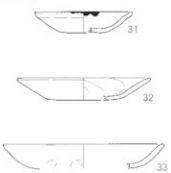


出土遺物（1）

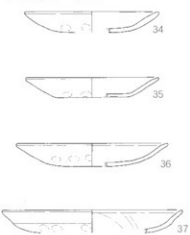
曲輪Ⅱ　平坦面



曲輪Ⅱ　斜面

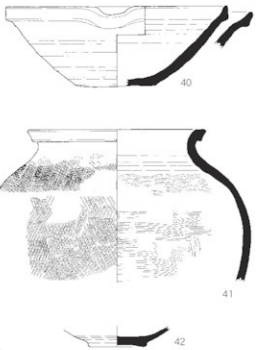


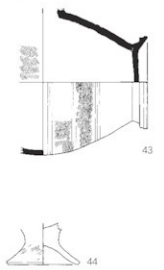
曲輪Ⅲ　斜面

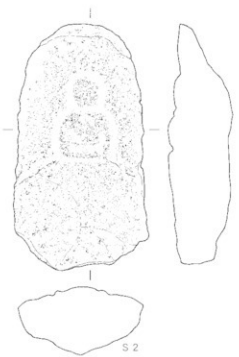


竪堀

出土遺物（2）

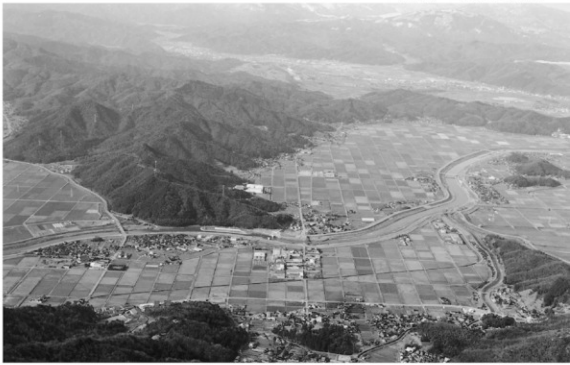






出土遺物（3）

写　真　図　版



遠景
（東から）

遠景
（北から）

鳥居城跡全景
（西から）

写真図版２　遺跡

鳥居城跡全景
（東から）

鳥居城跡全景
（北から）

調査区全景
（東から）

調査区遠景　調査前
（北東から）

東区　調査前
（北東から）

東区　調査前
（西から）

写真図版４　遺構

東区全景
（北東から）

曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ－２
（北から）

曲輪Ⅱ・Ⅲ・Ⅲ－２
（北西から）

曲輪Ⅱ　平坦面
（南から）

曲輪Ⅱ　平坦面
盛土除去後（南から）

曲輪Ⅱ　全景
（西から）

写真図版６　遺構

曲輪Ⅱ　溝・柱穴列
（北西から）

曲輪Ⅱ　溝
（西から）

曲輪Ⅱ　平坦面
盛土断面（北西から）

曲輪Ⅱ　北端部
盛土断面（南西から）

曲輪Ⅱ－２
（東から）

曲輪Ⅱ－２
（西から）

曲輪Ⅲ　平坦面
（南から）

曲輪Ⅲ　平担面
盛土除去後（南西から）

曲輪Ⅲ　平担面
盛土除去後（西から）

曲輪Ⅲ　溝
（西から）

曲輪Ⅲ　北端の小段
（西から）

曲輪Ⅲ　盛土断面
（北西から）

曲輪Ⅲ　溝断面
（西から）

曲輪Ⅲ　北端盛土断面
（南西から）

曲輪Ⅲ　犬走り状遺構
（西から）

曲輪Ⅲ－２　平坦面
（南から）

曲輪Ⅲ－２　平坦面
盛土除去後（南から）

曲輪Ⅲ－２　平坦面
盛土除去後（東から）

曲輪Ⅲ－２　平担面
盛土除去後（東から）

曲輪Ⅲ－２　平担面
盛土断面（西から）

曲輪Ⅲ－２　犬走り状遺構
（西から）

左）曲輪Ⅳ－２全景
（北東から）
右上）曲輪Ⅳ－２全景
（西から）
右下）曲輪Ⅳ－２全景
（東から）

曲輪Ⅳ－２付近断面
（西から）

通路
（北西から）

写真図版 14　遺構

竪堀 1 全景
（北東から）

竪堀 1 全景
（北東から）

左）竪堀 1 断面
（北東から）
右）竪堀 1 埋土内炭化物
検出状況（北から）

竪堀１付近の状況
（東から）

竪堀２
（北東から）

畝状竪堀
（北東から）

木棺墓
（南西から）

木棺墓
（北西から）

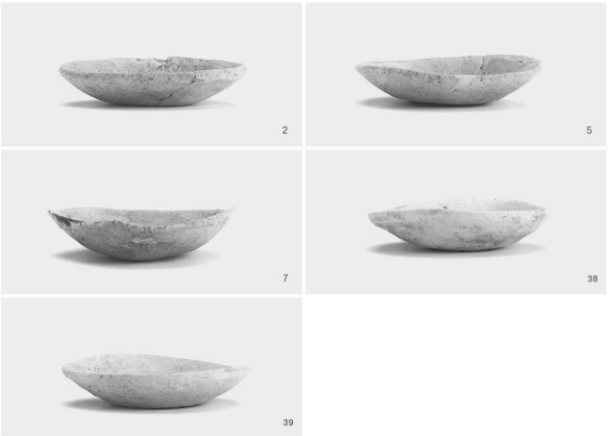
木棺墓　鉄剣出土状況
（南西から）

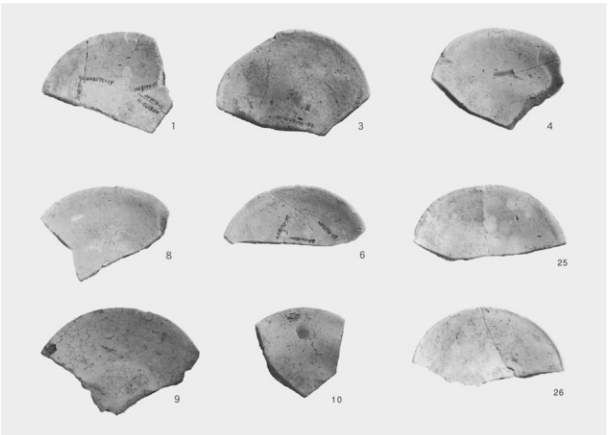
中区～西区全景
（北東から）

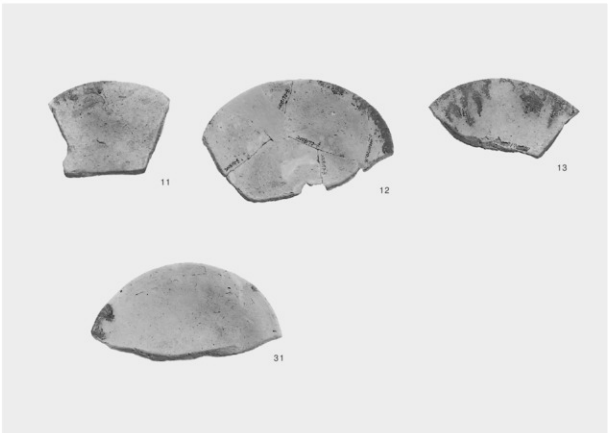
西区
（東から）

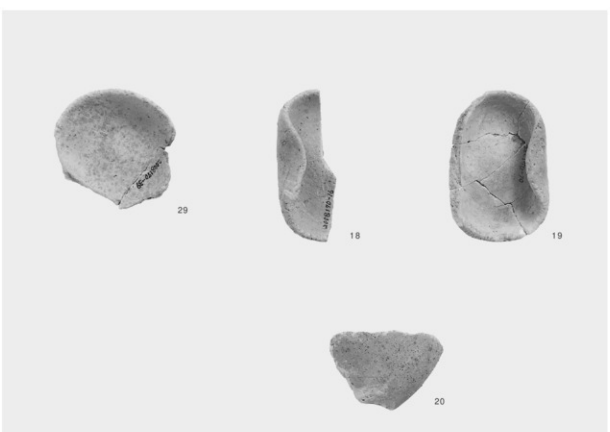
西区
（西から）

写真図版 18　出土遺物

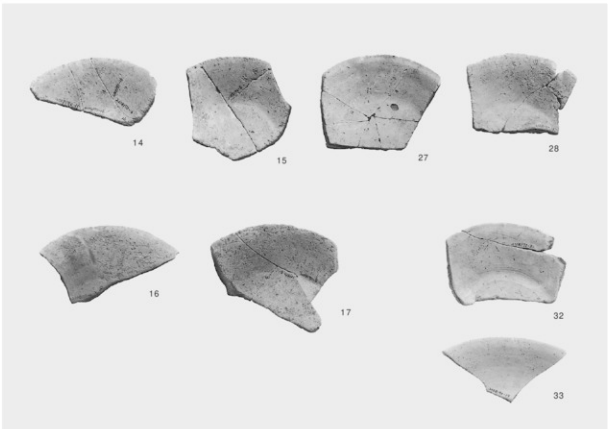


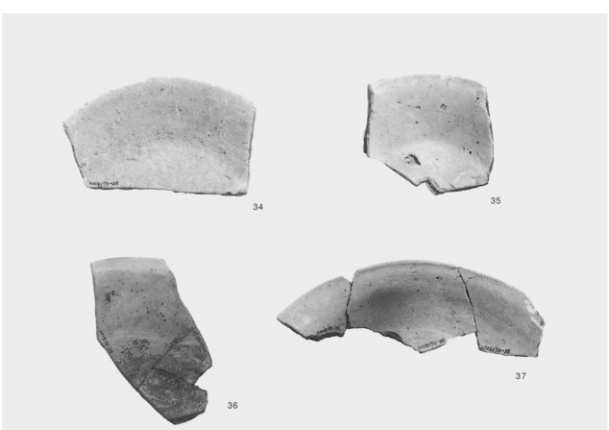


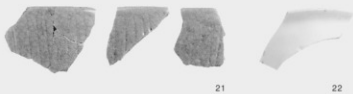

11
12
13
31


29
18
19
20

写真図版 20　出土遺物

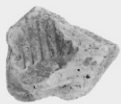




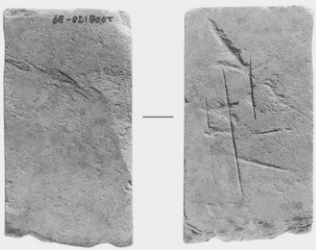

21　22

24

30

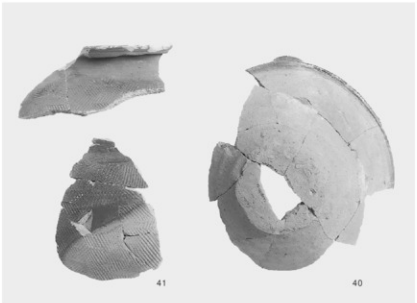

23

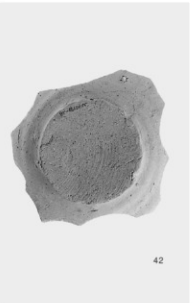
M1　M2

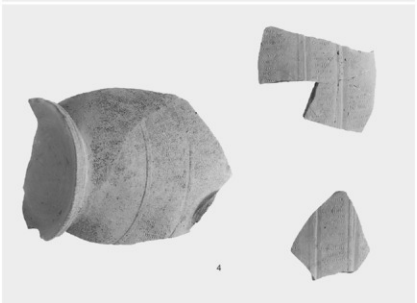

S1

S2

写真図版 22　出土遺物







兵庫県文化財調査報告　第392冊

豊岡市出石町

鳥 居 城 跡

一般国道482号鳥居橋橋梁整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成23（2011）年３月24日発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　株式会社ソーエイ
〒673-0898　兵庫県明石市樽屋町６－６